生活指導

いま、「部会」に問われていること

林　生信

わたしたち教師の日常がどのように変わったか、考えてみた。

出勤すると、職員室では学年打ち合わせのような相談が行われている。もう、「遅れた」感に苛（さいな）まれている。もうちょっと早く起きれば良かったと自分を責めたりしてしまう。保育園での引き渡しに時間がかかったのを悔やんだりもする。始業時刻には遅れていないのに。授業準備や印刷等で自分の時間として動いているなら、一向にかまわないのだが、公然と学年会らしきことが始まっている。それこそ、「もっと早く来て」というメッセージを受け取ってしまう。「受け取るからいけないのだ」と心理の本には書いてあるが、子どもたちへの指導としても「同一歩調」を求められている以上、気になる部分だ。「時間内にお願い」と言えるためも、もっと早く出勤しなくてはと思ってしまう。そういう圧迫される職員室から、教室に行くと少しの解放感は出てくる。しかし、教室に入るとたんに「せんせー、だれだれがねー……」と子どもたちに引っ張られる。楽しそうな話ではなく、「どうにかしてー」「早く処理してー」と、教育ではなく、事故処理のような対応を求められる。「今日こそは、楽しい教室に」という思いが、またどこかに消えていく。他の先生方は、「子どもたちと楽しそうに、生き生きと授業をやっているのに」と思ってしまう。自分だけが、力の無さで苦労しているのだろうと。そして、「自分は教師に向いていないのかも」と苛む。

「教員の働き方改革」というスローガンは、だれに対してのスローガンなのだろうか。もちろん行政へのメッセージだ。ところが、教員自身へのスローガンに変えられてしまってはいないか。「自己責任」で済まされているのでは。「働き方」は、教員自身の問題として、長時間勤務もあなたの働き方の問題なのだとも。なぜか「部活」問題が大きく取り上げられてしまう。授業の準備ができないという声も、あなたの「働き方」が上手くないからではと思われてしまっている。「そんなー」と天に向かって言うしかないのかも。一方で、「子どもの声を聴こう」「子どもたちに寄り添って」「インクルーシブ教育を」と様々な研修会で言われ、その報告を書きながら自分を責めてしまう。しかも、報告書の提出締め切り前に「点検」される。「締め切り」の概念さえも変わってしまっている。

生活指導部会での論議の中で必ず出てくる、多忙化による「自分の時間」の無さである。そんな先生方に、ＺＯＯＭで参加をと呼びかけている。そして、「こういう取り組みを」とか「実践を」と交流しているが、「時間がない」という現状も語られる。学校の様子や教室での子どもたちの様子などを聞くことから部会を行うようにしたい。それを聞いて、「大変なんだ。そのなかでがんばっているんだ」と共感するような部会運営にしたい。

（共同研究者）